

図書館報

光 丘

No.147



「松山能の歴史と現在の活動」

松山能伝承団体「松諷社」会長 榎本和介

静まり返った舞台に笛の音が静かに流れ、それに呼応するかのように鼓がリズムを刻み始めます。日が沈み、ようやく暗くなり始めた舞台をライトが照らす中、橋がかりから美しい装束を着、かすかに微笑んで見える面をつけた女性

がゆっくりと舞台の中央に歩み出ます。幽玄とも、優雅とも感じられる一瞬。酒田市の松山区で演じられる「薪能」の一場面です。

私は、日本の古典芸能の中で、室町時代にすでに完成したといわれる「能」が、このよ

うな東北の小さな城下町で、三五〇年以上も前から延々と演じられてきたことに驚き、そして感動しています。

私たちが演ずる松山能は、江戸時代に鶴岡酒井藩から分封した松山酒井藩の初代藩主の忠恒が江戸で家臣に能を学ばせ、松山に持ち帰ったのが始まりとされております。

静まり返った舞台に笛の音が静かに流れ、それに呼応するかのように鼓がリズムを刻み始めます。日が沈み、ようやく暗くなり始めた舞台をライトが照らす中、橋がかりから美しい装束を着、かすかに微笑んで見える面をつけた女性

まり、武家の式楽能として当時洗練された観世流という中央文化を持ち込んだのです。しかし、戊辰戦争を経て、藩政の解体と武家の没落によって迎えた明治維新後、松山能も消滅の危機を迎えます。

それでも、藩政時代から同好の集団があったとされ、その素地を持つ町方に引き継がれ、更に、宝生や黒川等の能役者に教えを請いながらも謡い継がれたことで、松山独自の能の形が作られたとされております。

その後も、松山能の伝承の危機はありましたが、その都度血のじむような先輩たちの努力によって連綿と謡い、舞われてきました。

その結果、昭和五十五年、「山形県無形民俗文化財」の指定を受けたのです。小さな町の小さな民俗芸能が一躍脚光を浴びるきっかけとなりました。

そして、この指定に込めるように、昭和五十七年に松山歴史公園に今でも残る江戸時代の建造物である「大手門」の所に特設舞台を設け「羽州庄内松山城薪能」が開催されました。「つめかけた約三百五十名の観客はかがり火に照らされたされる幻想的な舞に見入っていた」と絶賛されました。

これを契機に今日まで年三回の公演を行ってきています。一月の最も寒い時期、雪の舞う中で「雪の能・松山大寒能」。六月の白つつじの花が満開の頃に「花の能・薪能」。そして、八月に明治以降現在まで松山能伝承団体「松諷社」が年一回演じてきた「月の能・奉納能」です。

また、この定期公演以外でも、酒田市や鶴岡市のイベントに参加しつつ「松山能」の普及努力を行ってきたため、今では「松山能」が広く認められるようになりました。

しかしながら、伝統文化の継承はそう簡単な事ではありません。特に後継者不足は慢性的な問題としてあります。これまでも小学生への狂言指導を始め、若い人たちへの働き掛けを続けながら、会員確保に努めているところですが、充分とは言えない状況にあります。

それでも、城下町として歴史と文化を育んできた郷土への愛着を持った先人達が守り続けてきた民俗芸能「松山能」を、より素晴らしいものにするためにこれからも研鑽を積んでいく覚悟しております。

また今年、松山城跡地に立派な室内能舞台が出来ました。「松山能」の更なる前進の機会にしたいと思っております。

また、この定期公演以外でも、酒田市や鶴岡市のイベントに参加しつつ「松山能」の普及努力を行ってきたため、今では「松山能」が広く認められるようになりました。

また、この定期公演以外でも、酒田市や鶴岡市のイベントに参加しつつ「松山能」の普及努力を行ってきたため、今では「松山能」が広く認められるようになりました。

また、この定期公演以外でも、酒田市や鶴岡市のイベントに参加しつつ「松山能」の普及努力を行ってきたため、今では「松山能」が広く認められるようになりました。

また、この定期公演以外でも、酒田市や鶴岡市のイベントに参加しつつ「松山能」の普及努力を行ってきたため、今では「松山能」が広く認められるようになりました。



羽衣

案外知られていない

身近な鳥の生態(六)終

日本白鳥の会理事 角 田 分わかづ

キジバトにも婚姻色が…

婚姻色というのは、繁殖期になると体色が赤味を帯びてくることで主に魚類で有名ですが鳥類でも見られます。鳥類の場合、広義には繁殖期のきれいな色の羽毛(繁殖羽)も婚姻色と言われているようです。



写真1 婚姻色で見られるキジバト

酒田市周辺の身近な鳥の中で鳥類の繁殖羽以外の婚姻色をよく観察出来る種類は、オサギ・コサギ・チュウサギ

などでしょう。

案外気づかないでいるのが今回のキジバトの婚姻色だと思われまます。キジバトの婚姻色は、眼輪(目の周囲の露出した皮膚のこと)やくちばしの付け根、脚などの露出した皮膚が本当に赤くなって現れます。(写真1は、カラー写真だと婚姻色がわかるのですが、見たい方はインターネットに沢山のキジバトの写真がありますから検索してみてください)婚姻色は、繁殖期に主にオスが表す色ですが、困ったことにキジバトの場合繁殖期と言われる期間は、地域によって違いますが非常に長いのです。酒田市周辺では五月から九月初旬頃まで続きますが関東や関西なども少し南の方では三月から十一月頃まで繁殖しているとの報告もあります。このように繁殖期が長いために、どの個体が婚姻色を示しているのかは、よほど気

をつけていないと気がつかないのです。

鳥類が繁殖期になったことがよく分かるのが『囀り』です。よく耳にするあの『デッ・ポオポオ』という声はキジバトの囀りです。またキジバトは繁殖期になると翼をパタパタ音を立てながら斜め前方に直線的に上昇し、その後直線的に降下する特徴的なディスプレイ・フライトと呼ばれる飛び方もします。こんなキジバトの声や姿を見かけたら注意をして見て下さい。婚姻色が見られるかも知れません。

巣のつくりと場所が…

キジバトは、山鳩とも呼ばれ本来は里山周辺をすみかにしていた鳥です。それが、人間の住む集落や市街地周辺にも住むようになって身近な鳥となり庭や公園などの樹木等に営巣するようになりました。

このキジバトの巣はとても雑なつくりで小枝を数十本程ただ敷いただけのもので、巢の真下から見上げると巢の中の卵や雛が分かるほどです。それだけではなく最近では建物にさえも巣を作るようになって

ています。左の写真2のキジバトは、高さが8m位の鉄骨の梁に巣作りをしているものです。



写真2 鉄骨の梁に巣作り

見て分かるように巣というよりも単に鉄骨の上に枝を置いただけのように見えます。後日談になりますが、このキジバトのつがいは、すぐ頭の上が鉄製の屋根板のために、くちばしを少し開けて暑さに耐えていましたが、炎天下の暑さに負けて巣を放棄してしまいました。キジバトのゆで卵と焼き鳥が出来る場所で

繁殖期が長いのは餌に秘密が…

餌に秘密が…

前述したようにキジバトの繁殖期は、春から秋までで

なぜそんな長期間にわたる子育て(育雛)が出来るのかというと雛に与える餌に秘密があるのです。多くの鳥は、主に春に繁殖期を迎え、穀物を日常的に採食する鳥でも雛にはタンパク質成分の多い昆虫等を与えます。鳥類の繁殖期が春なのは、春に餌の昆虫類が爆発的に発生しそれを雛の餌にできるからです。

キジバトは、日常的には草花の実などの穀物を食べています。でもキジバトは、卵から孵化した雛にはピジョンミルクと呼ばれる液状のものを与えるのです。

キジバトは、抱卵中に親が自分の『そ嚢壁』に養分を蓄積し、それを雛の成長に合わせミルク状にし草花の穀物等を混ぜて与えるのです。そのために雛にタンパク源となる昆虫を餌として与える必要がなく繁殖期も長いのです。ピジョンミルクは、オス・メス両方の親が自分のそ嚢壁から作り出して与えます。

キジバトを含めて鳩類は、ピジョンミルクで雛を育てているのです。

「庄内の達人プロジェクト」

「聞き書きがつむぐ地域の記憶」

東北公益文科大学講師 小 関 久 恵

「庄内の達人を見つけよう！」をキャッチフレーズに、高校生が庄内で活躍する「達人」を訪ね、「聞き書き」する取り組み「庄内の達人プロジェクト」を進めている。平成二十五年度に文部科学省より採択された東北公益文科大学地(知)の拠点整備事業の柱のひとつ、地域リーダー育成を目的とする「庄内地域カレッジ」事業の一環だ。地(知)の拠点整備事業は、地域課題解決の拠点として機能することを目指す大学への補助事業であり、本学では「地域力結集による人材育成と複合型課題の解決」庄内モデルの発信」をテーマとしている。

「庄内の達人プロジェクト」は、高校生向けの人材育成プログラムで、平成二十六年から開始した。初年度のテーマは「食」。菓子職人、綿羊農家、蕎麦屋等、「食の達人」に高校生が聞き書きを行った。

「聞き書き」とは、聞き手が話し手の話を聞き、語り口をそのまま文章にまとめる手法だ。出来上がった作品は、話し手が一人語りしているような文章に仕上がる。例えば、次のような文章である。

「最初はの、二八蕎麦にこだわったの。二八蕎麦ってのは八割がそば粉、二割が小麦粉の割合でできた蕎麦のことです。そば粉八割、小麦粉二割に三回に分けて水回し入れてこねてくわけだ。一回目もサラサラになるまでやるわけだ。二回目もサラサラなるまでやるの。そうして、三回目の水でまどまんのよ。ころーっと。かっこよく。しっとり。」

これは、聞き書き手法について学ぶ一泊二日の合宿で、実際に高校生と大学生サポーターがまとめた作品の一部だ。話を聞かせてくれた蕎麦屋ご主人の方言や口調がそのまま活かされ、その人らしさが存

分に文章に表れている。これが聞き書きの醍醐味だ。

そもそも「庄内の達人プロジェクト」を企画した背景には、将来、地域リーダーとして活躍が期待される高校生が、肝心の地域社会との接点が少ないのではないかとという問題意識があった。私自身、北海道の田舎の進学校出身で、家庭と学校の往復が生活の中心だった。学校祭等で近隣住民と触れ合った機会も少しはあったのだと思うが、名前や何をやっていった人か等、具体的なことは記憶に残っていない。

「地域志向」の時代。それでも高校生は小・中学生と比較すると地域社会との交流が希薄になりがちである。そんな高校生が、一対一で庄内の人々と出会い、聞き書きする中で、この庄内地域がどのような人の思い、はたらき、関係性で成り立っているのかを知り、理解し、考えてほしい。そして、現代日本における少子高齢化、地域経済の衰退、人口流出等の社会問題についても語られる「ものがたり」を通して理解し、「社会」を知るきっかけにしてほしい。そんな思

いから企画した。高校生が残すことになる聞き書き作品は、民俗学の資料に匹敵するといわれ、後世へ伝承できる貴重な資料となる。

地域リーダー育成につながるかは、参加してくれた高校生の今後からしか分からない。しかし、確信していることが二つある。まず、現代社会で求められているリーダー像だ。先行きが不透明な中で課題解決に向かうには、多様な人々と対話し合意形成を促すファシリテーターのような存在が必要である。当たり前のことだが、対話は「話す」はもちろん「聞く」がなければ成り立たない。自分とは違う他者と出会ったとき、相手の存在に関心を持ち知ろうとしなければ質問は生まれにくい。聞き書きではその姿勢が問われる体験をする。

そして、地域への愛着が生まれるきっかけになるだろう。達人の話を通して、自分が生まれ育った庄内地域を違う角度から観ることができると、何より、達人をはじめとする多様な人たちとの出会いがここにはある。このプロジェクトは、地域の若者で構成される実行委員会と本学学生のサポートのもとで実施している。若者は、高校生が聞き書きを行う「庄内の達人」を選定し、その出合いをプロデュースする。大学生は、大学の講義で学ぶ聞き書きの知識、技術を合宿や勉強会等を通じて高校生に伝達する。

昨年度の参加高校生からは、「大変だった」が、「庄内の人にはあったかい」「庄内の人とてもいい人たちばかり」といった声が聞かれた。

ふるさとを思い出すとき、そこにあるのは「人」との記憶ではないか。「も」と庄内のことが知りたい。またそう言ってもらえるよう、微力ながら、記憶に残る出合いを創出していきたいと思う。



吉野弘さんの詩をめぐる対話 第3回

空と海、光と水の詩に寄せて

酒田・詩の朗読会 主宰 阿蘇孝子
月刊SPOON元編集長 佐藤晶子

佐藤 吉野弘さんは、何より生命論の詩人であり、幸福論の詩人でもあります。たとえば、「風」とか「雪」とか「樹木」といったように、作品の題材別に読んでみるのも楽しいし、さまざまな発見がありますよね。

今回は、酒田の夏の空と海が美しい季節を迎えましたので、「空と海の詩人」としての吉野さんについて語り合ってみようのですが、阿蘇さんは、まずどんな作品が浮かんできますか。

阿蘇 吉野さんの夏の海の詩といえは、「水着姿のギャルが写真の中から話しかけてきた」を思い浮かべます。吉野さんらしからぬギャル語(?)で書き進められる詩なのですが、途中から地球生成の隕石理論、海の起源、水の祖霊、細胞学者まで出てきて、最後は温暖化への警鐘を鳴らしている。表面に現れないことを深く洞察し、詩にしてい

く、吉野さんならではの詩だと、少しにんまりします。それから「豹変」。何時間もためつ

すがめつ海を、波打ち際を見つめていなければ、絶対出来ない表現。この見立てには脱帽です。

佐藤 私は、「海」という作品が忘れられません。昭和四十八年に「みちのく豆本」第五十八冊として刊行された吉野弘詩集『虹の足』の巻頭を飾る作品です。当時、私は大学生で親元を離れていましたが、酒田の祖父佐藤公太郎が豆本を送ってくれていました。この作品、いきなりこう始まるんですよ。「海は空に溶け入りたいという望み／水平線で かるうじて自制していた。／神への思慕を打ち切った恥多い人の／心の水位もこれに似ている」。海と空の風景に、信仰告白とも読める、

内的な葛藤を重ね合わせて、精神風景として描いている。そのことに驚き、衝撃を受けました。吉野さんには、ほかに「空と海」、あるいは「光と水」を対応させた作品がありますよね。阿蘇 「岩が」は、鳥海山の清らかな力強い湧水と、水系は違うんですが、最上川の悠々たる流れを連想させてくれます。流れに逆らって、そこにある岩と、しなやかに川上をめざす魚。それぞれが精一杯の形で川に棲まう姿を描いている。そして、それらを包括してある川。「流れは豊かに／むしろ 卑屈なものたちを／押し流していた」。詩全体に流れる清涼感。清冽で颯爽として、何か溜飲(りゅういん)が下がるといふか、気持ちのいい作品です。

水つながりで言うと、「湖」。湖が空を映し出している、美しい構図です。何かの本で読んだのですが、湖のことを「地上の瞳」と言っている人たちがいるそうです。吉野さんにも、そんな

な感覚があったのではないでしょう。湖は鏡面(きやうめん)のようであり、瞳(ひとみ)の中の水晶体(すいしょう)のようでもある。吉野さんにはここで、光をとらえ、事物を映し出す湖を擬人化し、「他を批評するだけで／自分を批評しない湖は」と、湖の批評眼をいかになものかと批評する。そしてまた、そんな自分自身に気づき、苦笑い。そのように、吉野さんの思考は、縦横無尽に転回する。柔軟、それでいて中庸を保って、決してぶれない。

光で思い出したのは、「一番高いところから」という詩です。「一番高いところからきた光が／一番低いところにいる水に弾かれて」逃げ惑う光の様子に、吉野さんのユーモラスな視線を感じます。それと同時に、驕り(おごり)とか偏見(へんけん)を根本から打ち砕く、強いメッセージが潜む作品です。佐藤 「空の色が」も大好きな作品です。美しい空の色に呼応する、深い海の色。「海」と同様、遙かな天空への憧れと、地上に生きる人間存在の感情世界とを対比させながら、恋する心を歌った相聞歌(あひま)でもあります。

それから、海に沈む夕陽を描いた「熟れる一日」。庄内海岸に沈む夕陽が美しい季節になると、思い出す作品です。文中どこにも酒田とか日本海という語

がないにもかかわらず、そこから酒田の海の光と匂いを感じてしまうのは、我田引水(わたひきみづ)に過ぎるでしょうか(笑)。余談ですが、以前、月刊「SPOON」の編集をしていた頃、『吉野弘全詩集』の全ページを探したところ、「スプーン」という語が登場する作品は、この一篇だけでした。阿蘇 吉野さんの記念すべき第一詩集『消息』は、突堤(つとひ)の先に立って海を見つめるエピグラフから始まっています。見つめる先に広がっているのは日本海。酒田港の灯台の防波堤から眺める日本海です。その後、たびたび登場する海は、擬人化されたり、比喩(ひよ)の対象だったり、おのれの心像(こんざう)の投影(ていけい)だったり、吉野さん自身、「海に」という詩の中で、「単に美しい風景として／見てあげようか／海」と自嘲(じちやく)するくらい、感情移入しやすい素材だったのだと思います。詩作の想像力を刺激する根底には、つねに故郷の日本海があった。

吉野さんにとって、それは、生涯消えることのない圧倒的な映像(えいよう)だったのでしょうか。私は、そのことに、深い感慨を覚えます。佐藤 こうして語り合ううちに、吉野さんの風が吹き始めたようですね。次回は「風」をテーマに取り上げてみたいと思います。



© SPOON 1991

吉野弘

(よしのひろし 1926~2014)

酒田市出身。酒田市琢成第二尋常小学校、酒田市立商小中学校を卒業後、帝国石油合組に入社。戦後は、労働組合より執行部で活動。肺結核病中に詩作を開始。1952年、『I was born』で詩壇デビュー。1957年、酒田の『新詩』集より第1詩集『消息』出版。1972年、『感傷旅行』で読売文芸賞を受賞。1994年、『吉野弘全詩集』を刊行。

『小泉庄司家文書』の紹介

一八幡小泉地区大組頭文書一

光丘文庫古典籍調査員 杉原丈夫

はじめに

小泉庄司家は江戸時代の肝煎の惣元締めである大組頭職を歴任していました。地域では御館様と呼ばれて指導的立場で地域を支配していました。そのため肝煎としての村方文書を所有していたことは言うまでもなく、他の大組頭と同様数か村の肝煎の長を務めていたため組及び村の史料を多数所有していました。

二庄司家文書の内訳

〈小泉庄司家文書の内訳〉
酒田市立光丘文庫所蔵文書より作成

No	種類	点数	割合
1	支配	53	11.70%
2	土地	3	0.66%
3	租税	5	1.10%
4	村	4	0.88%
5	戸口	9	1.99%
6	災害・救恤	4	0.88%
7	土木	6	1.32%
8	産業	7	1.55%
9	農林業	7	1.55%
10	金融・貸借	4	0.88%
11	工・鉱業	4	0.88%
12	商業	2	0.44%
13	交通・運輸	5	1.10%
14	宗教	20	4.42%
15	学芸	215	47.46%
16	家	52	11.48%
17	絵図	24	5.30%
18	典籍	1	0.22%
19	その他	28	6.18%
	合計	453	100.00%

こでは紹介していきます。
一 庄司家について
酒田市の小泉地区の庄司家は、江戸時代に代々荒瀬郷島田組小泉組の大組頭を勤めた家柄で周辺地域の各村の肝煎の長であり、有力な農民でした。

その内訳をみると、最も多い分類項目は15の学芸で215点を数えます。この中には100点以上が1束になって1点と数える短冊など5束存在します。庄司家が代々俳句・和歌などを極めた証です。鈴木重胤の書画の掛軸も存在します。

次に多いのは1の支配で53点あり、内容項目は、城主等21点、国役・議員等3点、大庄屋・大組頭は10点、法令・お触達は11点、外国船他3点、戦争2点、その他3点となっています。次が3の家が52点で、最近の当主が庄司家の論文や婿入り先の野附家系譜などの論文原稿などあります。続いて絵図、宗教、戸口、産業、農林業、土木、租税、交通・運輸、村、災害・救恤、金融・貸借、工・鉱業、商業、典籍、その他と続きます。

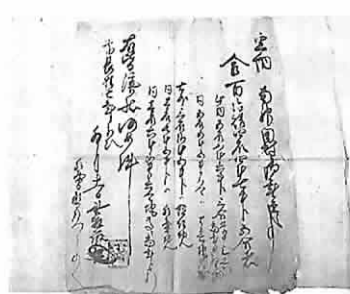
三庄司家の系譜について

- 一代 宗祠 甚太郎
- 延宝七年(一六七九)没
- 二代 臣司 清太夫
- 元禄十五年(一七〇二)没
- 三代 基風 甚五兵衛
- 八代まで大組頭
- 四代 知義 幾右衛門
- 五代(庄司) 甚助
- 六代(庄司) 甚太郎
- 七代(庄司) 直弥
- 二男の彰常(酒田米屋町組大庄屋九代目野附七郎兵衛)
- 八代(庄司) 六郎
- 明治二年家督相続
- 四大組頭は最上川以北・川北
- 即ち北庄内に特有の役職で、御給人(庄内藩下級武士)の扱

いを受けていましたが、土地を所有し肝煎(村長)を兼ねていたので、苗字や帯刀は特別の場合でなければ許されませんでした。しかし、川北の大組頭は北庄内に20名程いて、村のみならず郷・組の頭として当時の農民から信頼され、その役職は、指導的な役割を果たしていました。また、学芸にも優れ、寺子屋を開き明治以降の学校設立に重要な役割を果たしています。庄司家当時の当主の次男のある彰常は、酒田三町の米屋町組大庄屋の野附家に養子となり、九代目を襲名しました。その後、幕末期から明治にかけて酒田町組・米屋町組大庄屋や旧酒田町の戸長や学区取締りなどを歴任し、酒田町行政のリーダーとして手腕を發揮しています。

六酒田市指定文化財

庄司家の資料の中には市指定文化財が5点存在します。「連署状」「来次出雲守書状」「同上書蹟龍髭」「同上鶴亀」「遊佐郡荒瀬郷南神田村検地帳」「同上観音寺村検地帳」など貴重な資料があります。指定文化財のみならず、これから庄司家453点の資料について、今後の活用が期待されます。



慶長17年(1617)斎藤筑後守年貢皆済状

これは慶長十七年の年貢を納めた時の皆済状です。斎藤筑後守は、当時亀ヶ崎城の三奉行の内の一人で当時検地や年貢の収納の責任者でした。



平成二十七年度の

図書館運営

図書館長 阿部 博

一 図書館の運営方針

図書館は生涯学習支援機関であり、また地域の情報センターの役割を担っており、市民がいつでも安心して快適に利用できるように図書資料や情報の充実・整理・保存に努めるとともに、展示スペースの拡大やビジネスコーナーの設置など、積極的な図書館サービスの充実に努め、子どもから高齢者まで幅広い年齢層の利用拡大を図ります。

また、「第2次酒田市中心子ども読書活動推進計画」を策定し、学校や保育園、関係部署等との連携により、さらなる子どもの読書環境の整備を図ります。

二 図書館の重点施策

①市民の知的欲求や調査研究、そして余暇活動等に資するための有用な資料や情報を収集し、利用者の増加を図ります。

②インターネット等を利用した検索・予約機能等を充実させることにより、利用者の利便性の向上を図ります。また、ひらた図書センター、八幡分館、松山分館、東北公益文科大学間の連携を強化し、地域の均衡ある図書利用の拡大に努めます。

③他の公立図書館と緊密に協力し、図書館資料の相互貸借を推進します。

④レファレンス(調査・参考業務)機能の充実を図ります。

⑤展示スペースを拡大し、図書資料の紹介に努めます。

⑥図書利用のスキルアップを目指した講座を開催します。

⑦絵本作家講演会、おやこ読み聞かせ教室の開催、読書ボランティアの育成、ブックスタート事業への支援、学校図書室への支援などを行います。

今年度は総合文化センターの耐震化工事により、児童図書室が4階に一時移転するなど、ご利用の皆様にはご迷惑をおかけする形になっておりますが、ご理解とご協力をお願いします。



光丘文庫

平成二十七年度の取り組み

大正十四年十二月、「財団法人光丘文庫」として出発した酒田市立光丘文庫も、幾星霜を経て満九十歳を迎えることになりました。

この間受け継いだ古典籍や漢籍、古文書、個人の旧蔵書、史資料などは、貴重な文化的資産・財産であり、数多くの市民の方々や県内外の研究者の方々の求めに添えるため、次の取り組みを行います。

① 史資料等の保存と公開

各種文書、史資料等を適切に整理・保存し、古典籍調査及び目録の作成を継続しながら、閲覧者の利便性を図ります。

② 情報の提供・活用

丁寧かつ迅速なレファレンスサービス(資料検索・提供・回答)に努めるとともに、古典籍や古文書、絵図以外は、資料の劣化や装丁に影響のない範囲で、コピーサービスを行います。

③ 資料の展示

光丘文庫所蔵の資料展を年二回程度開催し、市民の方々に広く紹介するとともに、展示内容にかかわるギャラリートークも開催いたします。

今年度は前期展示として、五月十九日から九月十九日まで『大和、出羽、神代に観る世界展』を実施。後期展示として、十月六日から平成二十八年二月二十八日まで『江戸期における庄内・酒田の医学』(仮題)を企画しております。

なお、将来に向けた検討課題として、建物が市指定文化財という点を考慮し、海外からの観光客等に向けた光丘文庫紹介のリーフレット(英語・中国語・ロシア語・韓国語)作成につ

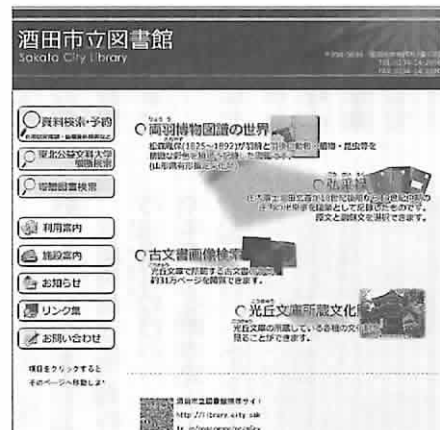
いての検討を行います。

酒田スワンロータリークラブから図書への寄贈

酒田スワンロータリークラブの創立二十五周年記念事業として、次代を担う児童や青少年や広く市民の読書環境の充実を図っていただきたいということで、図書の寄贈がありました。

インターネット・スマホ等で本の検索や予約が可能ですが、酒田市立図書館のホームページから、図書館の本の検索や予約が簡単にできます。

予約した本の受け取りや返却については、中央図書館だけでなく、ひらた・八幡・松山の分館等や、東北公益文化大学のメディアセンターでも可能です。



酒田市立図書館ホームページ http://library.city.sakata.lg.jp/

デザイン 佐藤 十弥

発行

酒田市立中央図書館 酒田市立光丘文庫

酒田市立中央西町二番五九号 酒田市日吉町二丁目七番七一号

電話(24)二九九六番 電話(22)〇五五一番

印刷 明徴出版(株)